

## 旧制岡山二中の校風の形成 (II)

—— 初代校長武居魁助の人生観・宗教観 ——

渡辺 一 弘

(広島大学50年史編集室)

### I. 問題の所在

本稿は、旧制岡山二中（大正10年開校、現岡山県立岡山操山高等学校）の校風の形成を、初代校長武居魁助（たけすえ・かいすけ）との関係からの検討の第2報である。本稿では、武居の人生観、宗教観を中心に主に武居の個人史の後半部分に焦点を当てて、彼の思想が如何に岡山二中の校風の形成に影響を及ぼしたかを、検討することを目的とする。

筆者は1999年以来本紀要において、岡山県の事例から後発旧制中学の学校文化を先発旧制中学の学校文化と比較しながら検討してきた<sup>1)</sup>。昨年度の本紀要では、『旧制岡山二中の校風の形成—初代校長武居魁助を中心に—』という題目で、岡山二中の校風形成に多大な影響を及ぼしていた、と学校史や卒業生の回想録に多くの指摘がある初代校長武居魁助に焦点を当て、武居の原稿や手記が収録されている『魁翁心語』を分析資料として、彼の個人史に注目しながら彼の教育観の検討を通して、後発旧制中学の岡山二中の校風を検討した。その結果岡山二中の校風の形成にあたっては、武居の訓育重視の姿勢が質実剛健の質実な部分とファミリー的な校風の形成に影響を及ぼしていることが明らかになった。そしてその背景には、武居の家庭教育重視の教育観があり、このことは武居の個人史から、幼少期において母親から強い影響を受けたことが理由であると思われる。一方、質実剛健の剛健な部分、スバルタ的で厳しい雰囲気については言及することができなかった。

本稿では第1報で触れなかった、武居の大病、武居と宗教の関係など『魁翁心語』の武居の人生観や宗教観についての記述部分を、特に武居の個人史の後半部分に焦点を当てて、岡山二中の校風との関係を検討する。

本研究の意義は、第1報で指摘したとおり、従来の戦前期の教員を対象にした個人史やライフコースに関する研究において、初等教員に比べて中等教員を対象にした研究が少ないこと、中等教員を対象とした研究でも、地域の中等教育史の一環として校長の教育者像に注目し、学校の史的発達や地域の文教的風土を明ら

かにしようとした研究（例えば、二見 1993）は見られるが、校長と校風の形成の関係を主軸に検討した研究はあまり見られないこと、岡山二中開校（大正10年）以来、25年間もの長期に渡り校長を務めたので武居を検討することで、戦前期の学校運営の全体像をみることができると、などである。さらに今回、校長の人生観、宗教観に着目することで、武居と同様に、他の学校史等によく見られる、禅やキリスト教など宗教によって支えられた人生観や教育観をもつ戦前期の中等学校の校長<sup>2)</sup>の教育方針との関連も言及することができる点にある。

なお本稿で用いている「先発校」「後発校」という言葉は、前回と同様に、明治32年の中学校令改正（第二次）以前に開校した旧制中学を「先発校」、それ以降に開校した旧制中学を「後発校」と定義した<sup>3)</sup>。

### II. 分析資料『魁翁心語』と岡山二中校長就任以降の武居魁助

本稿でも第1報と同様に、1991（平成3）年に刊行された『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』（以下『魁翁心語』と略記）を分析資料として用いる。分析資料の詳細は昨年の本紀要で説明したので、ここでは簡潔に示す。この本は、元々武居を慕う教え子達が武居の手記を中心にまとめて、1950（昭和25）年に刊行した旧版『魁翁心語』に、岡山操山高等学校創立九十周年記念事業として、武居死後の翌年（昭和28）の一周忌追悼座談会の内容と、その他の思い出の手記等を併せて新たに刊行されたものである。旧版の『魁翁心語』は、武居が亡くなる2年前に刊行されたもので、「念願」「励まし」「経営の片鱗」「病気の体験」「心の叫び」「法の雫」「雑録」の七つの章に分けられ、各章に武居の談話の草稿、様々な原稿等が少ない章で3本、多い章では17本が収録されている。なお言うまでもなく、書名は武居の名前に因んでいる。

本稿では、「雑録」を除き昨年の紀要で検討しなかった「病気の体験」「心の叫び」「法の雫」の三つの章を中心に、武居の人生観、宗教観の記述部分を検討する。

武居は、1885（明治18）年山口県下松市に生まれ、

表1 武居魁助略年譜(岡山二中学校長就任以降)

年	経歴
1921(大正10)	1月31日、公立中学校校長兼教諭(高等官七等待遇)に任ぜられ、新設の岡山県第二岡山中学校校長兼教諭に補せられた。(36歳)
1922(大正11)	文部省より欧米各国へ出張を命じられ、3月16日出発、同年10月30日帰国。(37歳)
1927(昭和2)	2月、母マツ死去。(42歳)
1929(昭和4)	甲状腺癌を患い、前後十二回の手術を受ける。(44歳)
1931(昭和6)	高等官三等待遇(中学校長の最高)となる。(46歳)
1935(昭和10)	1月、国清寺に於いて人間佛教団総裁立田英山に初めて会う。(50歳)
1936(昭和11)	4月、両忘禅協会総裁両忘老より、玄旨の道号を授けられる。(51歳)
1937(昭和12)	10月、次男正躬教え25歳で急逝。(52歳)
1938(昭和13)	正五位勲五等に叙せられる。(53歳)
1940(昭和15)	文部大臣より表彰を受ける。(55歳)
1944(昭和19)	従四位に叙せられる。12月、病氣再発し、二回の手術を受ける。(59歳)
1945(昭和20)	3月31日、願いにより岡山県第二岡山中学校校長を退職。(60歳)
1946(昭和21)	4月、長男知也教え35歳で死去。11月13日、岡山県選管会で県選挙管理委員会委員に選ばれ、初代委員長に就任。同年、家事裁判所調停委員(昭和23年まで)。(61歳)
1949(昭和24)	3月3日、人間佛教団総裁耕雲老より、不説の庵号を授けられる。県選挙管理委員会委員長に再任されるも辞退。(64歳)
1952(昭和27)	病氣再発のため入院したが、8月19日自宅で逝去。享年69歳。法名(成名)は「不説院釈魁助玄旨居士」。

出典：『魁翁心語一誠と愛の教育者武居魁助先生一』、『創立七十年史』、『創立百年史』、『尚志 会員名簿 昭和30年版』より作成

山口県師範学校卒業後山口県師範学校附属小訓導を経て、広島高等師範学校数物化学部を卒業。その後、福島県師範学校教諭、岡山県師範学校教諭、岡山県視学を経て、1921(大正10)年、36歳で岡山二中学校に就任した。校長就任以降は表1の略年譜に示したとおり、欧米出張、数度の大病と手術、禅の修行、二中校長退職、県選挙管理委員会委員長、家事裁判所調停委員などを経て、1952(昭和27)年逝去、享年69歳であった。

### III. 分析結果と考察

#### (1) 岡山二中学校長就任以降の武居

岡山二中学校長就任以降、武居は古い伝統をもつ先発校岡山一中(明治7年開校、現岡山県立岡山朝日高等学校、以下「一中」と略記)に対して、新しい岡山二中(以下「二中」と略記)の教育方針を如何に樹立するかに苦心した。その結果、学校史や卒業生記念誌等にも多くの指摘がある「魂の教育」、「心の教育」をモットーとする二中精神を築いた。学校史によると、「善良不動の校風を樹立によって言説を用いずして人格の意識的陶冶の域に達せしめんとしたのである」(岡山操山高等学校 1999, 98頁)との指摘がある。具体的には、校風の中心要素として、第一学年に「真摯努力の習慣」、第二学年に「克己奮闘の習慣」、第三学年に「質実剛健の気風」、第四学年に「自立自重の精神」、第五

学年に「愛校自治の精神」をそれぞれの学年の努力目標として提示したのである(岡山県第二岡山中学校 1931, 56-59頁)。以後武居は、日々の学校経営の中で、全校生徒への講話や修身の授業、校友会誌の巻頭言等を通じて、自分の教育方針を生徒・父兄・教職員へと伝えていった。卒業生の回想でも、武居の教育方針についての代表的な指摘は、以下のようなものである。

「二中健児、二中魂とは何だったのだろうか。戦前のものだった。いや未来永劫に伝えなくてはならないすばらしいものでした。「友情と団結」それは武居イズムに外ならないと思います」(T・M(昭和19年卒)岡山県第二岡山中学校第十九期会 1984, 54頁)

「我々が二中に学んだ頃の教育理念は?『教育における情熱、生徒への愛情、時流に阿らない高い見識、それらを基盤とした人間尊重、個性教育等々』、武居校長の偉大さは(略)」(I・I(昭和25年卒)<sup>4)</sup>「青桐」編集委員会 1990, 18頁)

武居は、後発校二中の名校長として、同校関係者とはもとより他校や県下にその評判は広まっていったようである。先発校一中の学校史資料においても、以下のような指摘がある。

「一中の校長はきびしく、二中の方が校長はよいと当時の市民の噂」(U・T(昭和15年入学)岡山朝日高等学校 1980, 20頁)

また、昭和14年刊行の『岡山縣紳士録』でも「非常時日本に輝く学園の守護神 凱旋の声高し 武居魁助氏」の見出しで、

「(略)岡山縣第二中学校が創立されるや意義ある初代校長として同校百年の教育モーゼを確立、質実剛毅な校風によって飽く迄も武居式な精神教育を實踐遂に今日の名校岡山二中の覇業を完成したのである。(中略)現に先輩学校である岡山一中を凡ゆる点において完全にリード、同校に代って縣下第一の代表的中学の名を獲得しているのも宜なる哉である(略)」(下線筆者)(小松正道編 1939, 24-25頁)

と校長としての武居の手腕を絶賛している。なお見出しの「凱旋」だが、武居の欧米教育視察は大正11年であり、本文の冒頭に「知育注入の欧米教育が漸次我国教育界から抹殺され、躍進日本の地殻の底から盛り上

がってきた日本主義教育が非常時の脚光を浴びて(略)」とあるので、おそらく昭和12年の日中戦争以降の大陸における軍部の勝利を指していると思われる。

武居と宗教との関係については、学校史をはじめ多くの学校関係資料に、武居と禅に関する記述がある。卒業生の回想でも以下のような指摘がある。

「確か五年生の時、武居校長の特別のお計らいで、寄宿舎生若干名が近くの寺に数回参禅する機会を与えられた。難解な禅問答を教わったわけでは勿論ないが、只管打坐を通して「静慮」を学び得たのは誠に貴重な体験であった」(I・I (昭和19年卒) 前掲 1984, 39頁)

また旧職員の回想では、

「先生は昭和四年頃から鋭く省察されると共に禅に親しまれ、宗教に深く入られた。私の考えるところでは、昭和十年前後から生徒に話されることが宗教哲学の味があったようだ。それまでは生徒には直接禅は余り説いておられなかった。(中略) 昭和十四～十五年頃から先生の宗教的修行は益々深く、禅的修行の実践がはっきりと授業や訓話の内に表れてきた。又これは私が二中を去って後のことだが、大戦の最中、上級生に対しては国清寺で座禅・禅話が行われたようだ。この観念的に深まって来られた時代と大正末期、昭和初期の意気軒昂だった時代とは先生の教育観にかなりの隔りがある。ただ一貫して変らなかつたのは、用語や表現は変化しても、努力精進、質実剛健の気風を青年に植えつけることと、日本人たる意識に徹せしめることであった」(下線筆者)(T・I (旧職員) 岡山操山高等学校 1969, 247頁)

とあり、表1の略年譜で確かめると、第1報で言及した強い影響を受けた母親が亡くなり、自分自身も大病を患った時期から深く禅に傾倒していったことが伺える。武居の四男俊郎氏(元高梁高等学校校長)への書簡による調査でも、元来武居は広島高等師範学校在学中より、禅やキリスト教に関心をもっていたが、昭和4年の生死に関わる大病の体験が死という課題に真剣に取り組み始め、昭和10年の人間禅教団総裁立田英山の講義を聴いて強い感動と共鳴を覚え、人間禅教団に入門し、昭和12年の次男の25歳での急逝で、その後更に深く禅の修行に打ち込み、人間的にも一層深みを増した、との指摘があり、时期的に先の指摘とほぼ同様

の経緯であることがわかる。

## (2) 武居の人生観、宗教観

岡山二中校長就任以降の武居の人生観、宗教観について、『魁翁心語』の「病気の体験」「心の叫び」「法の掣」の各章の記述の検討を行う。以下の鍵括弧の文章は、特に但し書きがない限り『魁翁心語』における武居の文章からの引用である。なお各章のそれぞれの節に相当する原稿の題目は〈 〉で示した。

### 1. 「病気の体験」の章

この章は、昭和5年11月から昭和11年7月にかけての、友人への病気見舞いの返事、病気の体験の回想、死について、の3つの節から構成されている。この章では、病気の経験から死についての武居の考え方について触れてある。〈友人の病気見舞いに対する返事〉では、以下のように病気をきっかけに神や人生に対する考え方が変わり、感謝していると述べている。

…「現在の小生は何等悲観も失望も致し居らず寧ろ病気によりて尊き体験を得候事を感謝致居る次第につき何卒御心配無之様願上候(中略)換言すれば有るがままの我を即ち神と信ずる小生は如何なる病苦も之を我と二元的に考ふるものには無之候」(昭和5年10月25日)

同様に〈病気の体験を回想して〉においても、

「誰も好んで病気になるものはないだらうが、なってみれば病氣も尊い修養の体験で有り得る。御承知の如く私は数年前思はぬ大病に罹り、諸君にも少なからざる心配をかけたことがあるが、実は昭和四年あの病を得たごとが私にとっては誠に得難い修養の機会であったと感謝して居るのである」(昭和10年6月同窓会誌所載)

と大病を患い、死に直面して死を真剣に深く考えたことが得難い修養の機会であったと吐露している。さらに、文字どおり〈死といふことにつきて〉では、

「人の価値は生理的生命の長短によるものではなく、其の人格的活動の質と量とによって決定するものである。(中略)確固不動の信念と懸命不断的の努力とに基づいて其の本分を尽くし、以て尊き人生の意義あらしめんことを期待すべきではあるまいか」(昭和11年7月同窓会誌所載)

と述べており、武居が死と直面したことで、人生を意義あるものにすべく、懸命に努力して生きることを同窓生を通して自分自身に説いていることが伺える。

## 2. 「心の叫び」の章

この章は、昭和20年4月から昭和24年年12月にかけての、退職の挨拶や戦後の創立記念式典での祝辞原稿等4つの節から構成されている。この章では、二中退職後の武居の晩年の文章が収録してある。〈退職の挨拶〉では、退職の理由を以下のように述べている。

「英国ラグビースクール<sup>5)</sup>のトーマス・アーノルド校長は、その伝記中に自分が階段を走って上がることが出来なくなった時は、其が学校を辞める時だと言っていますが、私はそれを読んで深く感激し、私は私の在職が二中の発達を阻害すると自覚したときは、深く二中を去るべき時機であると心中に決して居り、常に自分の在職が二中の発達を阻害はしないかと反省しつつ今日に至ったのであります。又私は健康で活動しようとするに職中死することが、私の死期として最上のものであると念願して居ましたが、其の念願は果たされないで病気の為今回中途退職するに至ったのであります」(昭和20年4月10日)

この箇所以外にも「死」について言及した所がいくつ有り、武居にとって二中の退職は、ある種人生の終わりの如く、所謂一般の「退職の挨拶」とは異なり、人生最後の決意表明のような雰囲気が漂っている。

〈創立二十五周年記念式に臨みて〉においても、同様に二中についての強い想いが語られている。

「本校に対する愛着の念は年と共に深まり、遂に二中と共に生きなことを念願し、若し二中在職中に死することが出来たならば私として死処を得たものであると思ひ、それを以て第一の本願とし少くとも教育者としての一生を二中に捧げんとするの決意を固めるに至ったのであります。その気持の一端として毎年創立記念日に頭髪を一本づつ抜き取り、死亡又は止むを得ず本校を退く際は之を学校の地中に埋め永遠に二中の土と化せしめんことを期し、遺髪として常に校長室の机の抽出しの中に入れて居たのであります」<sup>6)</sup>(昭和21年1月25日)

同様の内容は、〈創立三十周年記念式祝辞〉でも見られる。〈退職後雑感〉では戦後の学制改革に触れ、二中が廃校になり、二高を経て岡山第一女子高と統合し

て、操山高等学校と改められるにあたって、二中同窓会の行く末を案じている。そして自分は、

「今後は健康の許す限り微力を二中の同窓会と今一つ私が属して居る修養団体の人間教団とに捧げようと深く期して居る次第である」

と退職後4年たっても、二中の同窓会活動と禅の修行を希望する旨を語っている。

## 3. 「法の掣」の章

この章は、昭和20年10月から昭和24年10月にかけての、戦後日本の復興と宗教に関する4つの節から構成されている。この章では、新日本の建設や日本文化<sup>7)</sup>の特質と禅の修行等について触れてある。戦後すぐの、しかもアメリカ民主主義の影響が一気に押し寄せたこの時期に、禅や日本文化と絡めて戦後日本の復興に関して言及したことは特異なことであろう。〈新日本の建設と禅〉では、時の為政者・指導者に対して、新しい日本の見取り図の内容を具体的に明示し、国民に正しく指導するよう提言しており、武居自身の民主主義における平等と自由の意義を略述し、宗教の力の重要性を以下のように述べている。

「幣原内閣の施設方針に関する教育の項に於て、今後の教育の重点は、個人の完成と国家社会への奉仕とを目標とすると述べているが、個人の人格の完成を図ることは、やがて平和国家の建設を期することになるのである。而して個人の人格完成を図る上に於て第一義的方法は、教育よりも寧ろ宗教の力、殊に禅の修行に拠ることが至極の要訣だと信ずる」(昭和20年10月凡夫禅所蔵)

〈日本文化の一特質について〉でも、我が国の文化の素材として俳句と茶の湯を取り上げ、禅との関係を指摘して、その特質である幽玄枯淡なる寂びが、国民生活の安定向上には直接寄与することは少ないが、真の文化国家日本の建設には重要である、と論じている。さらに、〈道と悟〉でも、

「即ち人間が自然道と一如となるの体験が肝要である。而してこの体験は、知の世界に止まる科学や哲学の力によって得られるものではなく、知の世界を超越した悟の世界である宗教の力によらなければならぬ」(昭和24年3月1日)

と宗教の重要性を述べ、道の本質に徹しようとするた

めには、どうしても宗教的体験、即ち悟りの境地を透過することを主張している。

以上が、『魁翁心語』の「病気の体験」「心の叫び」「法の掣」の各章の記述の検討である。大病をして死に直面して、以前よりも増して充実した人生を送ろうと模索したこと、またその経験が余計に二中に対して強い想いを抱かせたこと、そして最終的に、禪の道へ進ませた、とまとめることができる。

#### IV. まとめ

以上『魁翁心語』を主な分析資料として、岡山二中の校風の形成を、武居の人生観、宗教観といった観点から検討してきた。その結果、「病気」「死」「禪」が彼の後半生における重要なキーワードとして互いに密接に結びついていることが同えた。そしてそのことが、武居を以前にも増して、強い気持をもって質素に日々一生懸命努力するようにさせ、その態度が、岡山二中の質実剛健でスパルタ的な雰囲気校風を作り上げ、第1報で明らかにした幼少期における母親からの強い影響が、一方の訓育重視のファミリー的な校風形成に影響を及ぼした点と共に、岡山二中の校風の形成に重要な役割を果たしたと考えられる。

最後に残念なことは、武居に大きな影響を及ぼしたと考えられる欧米出張についての直接的な記述が、『魁翁心語』には僅かしか存在しないことである。この点については、新たな資料収集と関係者への聞き取りでさらに検討したい。

なお、中国地方の都市部の後発校として、岡山二中とほぼ同時期に開校した鳥取二中（大正12年開校、現鳥取県立鳥取東高等学校）も、岡山二中と同様に教員、生徒同士がファミリー的でアットホームではあるが、勤勉で己に厳しく質実剛健な校風をもっているという。この校風の形成に重要な役割を果たしたと言われていた初代校長林重浩は、30代で娘を急病で亡くし、人生の無常を感じて禪を志し、その後半生を禪の修行に励んだとのことである<sup>9)</sup>。武居との共通点が興味深いことを指摘しておく。

#### 【注】

- 1) 拙稿 1999, 「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして—」『教育学研究紀要』第45巻第1部 中国四国教育学会編 226-231頁, 2000, 「戦前期における中等学校文化に関する研究—岡山県を事例にして(II)—」『教育学研究紀要』第46巻第1部 中国四国教育学会編 163-168頁。
- 2) 旧制中学の校長では、例えば鳥取中・鳥取二中の

名校長と言われた林重浩は、禪によって修養したことが知られており、茶道にも造詣が深かったという、松江中・千葉中・東京府立一中の名校長と言われた西村房太郎も参禅し、不動の信念、大乘仏教の精神をもっていたという、また沼津中の校長で麻布中の創設者としても知られる江原素六は、キリスト教徒であり、伝道の経験ももっている(唐沢編 1984, 中巻「12 中等教育に尽くした教育者」131-225)。

- 3) なお、本稿では該当しなかったが、後発校の中で、大正8年の中学校令改正(第三次)以前に開校した旧制中学は「地域先発校」と定義する。これは、時期的に後発校として開校した場合でも、地域においては最初に開校したり、「一中」という名称が付けられている学校もいくつかあり、地域における先発校として存在している状況を考慮したためである。
- 4) 二中最後の卒業学年。
- 5) 二中校長就任の翌年、欧米各国へ出張した関係で『魁翁心語』には外国の学校に関する記述もいくつか見られるが、その多くはイギリスのパブリック・スクールとオックスフォード大学、ケンブリッジ大学に関するもので、これらの学校の生徒・学生たちが、イギリスの将来を背負っているのは自分たちであるという自覚をもって勉学に励んでいることなどをしばしば言及している。ちなみに二中の寄宿舎がパブリック・スクールの全寮制を参考にした点については、拙稿 2000, 166頁で触れている。
- 6) この頭髪を地中に一本ずつ埋める、という話は〈退職の挨拶〉の中でも触れている。
- 7) 日本の文化については、本稿の分析で除外した「雑録」の欧米出張に関する章〈チェックスロヴァキアのソコールを観て〉で、「日本の国民性なり文化なりは、確かに世界に於いて特異の素質を有するには相違ないが、私は決してそれが欧米先進国のそれに比べて、必ずしも劣って居るとは信ずることが出来ない。否寧ろ勝って居る点が多いのではあるまいか、とさへ思つて居る」(大正12年9月 岡山縣青年團報所載)と指摘しており、早い時期から日本の文化に対して関心をもち、言及していることが伺える。なおソコールとは、武居の説明によると、「青年男女の自治団体によりて行はるる体育の謂」とのことである。
- 8) 前掲 1984, 186-190頁。

#### 【主要参考文献】

- ①秋山和夫 1972, 『岡山文庫 48 岡山の教育』日本文教出版社。
- ②「青桐」編集委員会 1990, 『青桐二中・二高卒業

40周年・還暦記念同期会記念文集】。

- ③二見剛史 1993,「加治木中学校(旧制)と谷山初七郎」『鹿児島女子大学研究紀要 第15巻 第1号』255-276頁。
- ④「魁翁心語」編集委員会 1991,『魁翁心語—誠と愛の教育者武居魁助先生—』岡山県立岡山操山高等学校同窓会「魁翁心語」刊行会。
- ⑤唐沢富太郎編 1984,『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—中巻』,『図説 教育人物事典—日本教育史のなかの教育者群像—下巻』ぎょうせい。
- ⑥記念誌「岡山尚志」編集委員会編 1989,『岡山尚志』尚志会岡山県支部。
- ⑦小松正道編 1939,『岡山縣紳士録』小松書房(非売品)。
- ⑧岡山縣第二岡山中学校 1931,『創立十年史』。
- ⑨岡山縣第二岡山中学校・岡山縣立岡山第二高等学校 1950,『創立三十年史』。
- ⑩岡山県第二岡山中学校第十九期会 1984,『岡山県第二岡山中学校 卒業四十周年記念誌』。

- ⑪岡山県立岡山朝日高等学校同窓資料室 1980,『岡山朝日高等学校教育史資料 第8集』。
- ⑫岡山県立岡山操山高等学校 1969,『創立七十年史』。
- ⑬——— 1999,『創立百年史』。
- ⑭尚志会 1955,『尚志会員名簿 昭和30年版』。

付記 分析資料の引用に際しては、旧字体の一部は新字体に改め、句読点や濁点を付した。本研究に関しては、岡山二中・岡山操山高等学校関係者の皆様は大変お世話になった。特に武居魁助の遺族、四男俊郎氏(元岡山県立高梁高等学校校長)には、書簡で貴重なご意見を伺い、資料も戴いた。その他の資料収集については、元広島大学ナノデバイスシステム研究センター非常勤研究員、羽田野剛司氏(現科学技術振興事業団・創造科学技術推進事業梅茶多体相関場プロジェクト研究員)の御協力を得た。また資料整理についても、元同センター非常勤研究員、森川慶一氏(現半導体理工学研究センター・設計技術開発部物理設計開発室研究員)の御協力を得た。記して謝意を表したい。